はじめに

本書は、本願寺出版社の月刊誌『大乗』での連載「随縁対談」の中から、いくつかを選んで収録したものです。「随縁対談」は、親鸞聖人七百五十回大遠忌（だいおんき）があった平成二十三年（この年に東日本大震災が起こりました）の四月号から平成二十八年の三月号まで、丸五年間続きました。一回だけ休載があったので、全五十九回です。実に楽しいお仕事でした。

そもそもこの対談シリーズが始まったのには、わけがありました。平成二十二年に、本書にも登場している大村英昭先生が、ご自分が末期のがんであることを公表されたのです。余命宣告まで受けたそうです。当時、大村先生はちょうど私が勤務している相愛大学へと着任されるところでした。そのため、打ち合わせする機会も多く、いろいろと語り合いました。

雑談の中で大村先生は、「私は長年にわたって社会学者として研究を続けてきましたが、死と正面から向き合ったとき、社会学は何の役にも立たないことがよくわかりまし

た。だから社会学の本をすべて捨てたんですよ」などとおっしゃっていました。お話をうかがううちに私は、「今、大村英昭の語りに耳を傾けねばならないのではないか」と感じ、さらにはそれを文字に残したいとも思いました。そんなわけで『大乗』誌上で、私が聞き役になって、大村先生に語っていただいたのです。本書でも大村先生のページがほかよりも長いのはそのためです。このときは、まさかその後、五年間も続く連載になろうとは考えてもいませんでした。

結果的に「随縁対談」は、いずれ劣らぬ個性派ぞろいのシリーズとなりました。毎回、話題は多方面に飛び、時には「いいのか、こんな話をしていて……。一応、本願寺の月刊誌なのに」などという場面も少なくなかったのです。そのすべてを収録しているわけではありませんが、事情通であればふふんと笑える箇所も点在しています。そのあたりも合わせてお楽しみください。

私は対談本を読むのが好きです。

出版界では「対談本は売れない」と言われています。実際、幅広く読まれることはないようです。でも対談本は、しばしば自分がまるで語りの場に居合わせたような気分にさせてくれます。いや、語り手の声の質感や息づかいまで伝わってくることさえあるのです。本好きにとっては、とても贅沢な体験ができる。それが対談本の魅力です。

ぜひ十三名プラス一名の息づかいを読み取ってください。この組み合わせだから起こる化学変化のような語りを発見していただければ、望外の喜びです。

今回はテーマ別にピックアップされたので、十三人の収録となりました。しかし、連載中はほかにも数多くの人たちにご登場いただきました。ご登場くださった皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

月刊誌『大乗』編集部の方々と、ライターの塚村真美さんには、長い連載を支えてもらった上に、書籍化にも尽力していただきました。ありがとうございます。また、ＰＨＰエディターズ・グループの小室彩里さんにも、お世話になりました。このご縁が、皆さまにとっても良い出会いとなりますよう願っております。

二〇一六年九月

釈 徹宗

随縁 つらつら対談

目次

本文構成　塚村真美（ワークルーム）
装画　三木謙次
ブックデザイン　本澤博子

はじめに

第一章 どうにも収まらない

宗教はどれも尊い 世界から仏教を見る——16
池上 彰さん【ジャーナリスト】
生きている、生かされている——17
葬式、お別れ会、いとこ会——23
宗教の違いを超えて——28

家族の縁もはかない だからいとおしい——32
大村英昭さん【大阪大学名誉教授・圓龍寺前住職／故人】
消費者体質でよいのか？——33
死者を弔うための共同体——36
「ホーム僧侶」の役割——42
来世を説いてこその宗教——44
ともに泣き、また生きていく——50
自分を超える力、誰かのために——54

第二章 負けそうになるとき

いいんだ 俺でいいんだ——62
井上雄彦さん【漫画家】

親鸞さまを生きたいのち――63
まじりっけのない笑顔を描く――70
我執を描く、仏の顔を描く――75

幾星霜の時の長さが心を伸ばす――82
玉岡かおるさん【小説家】
お寺に来たらほっとするわけ――83
見えない力を知っている人――88
教育の現場に宗教の揺さぶりを――94

そこがいいんじゃない！――100
みうらじゅんさん【イラストレーター】
ゆるキャラも仏像も安心感がある――101

自分のことだから自分の言葉で――104
即！ 容認、全部肯定していく――110
自分をなくしてこそ出会える――114

第三章 死と向き合う

孤独死はむしろ標準 楽しく生きよう――118
香山リカさん【精神科医】
宗教は謙虚さを実感する手立て――119
ハッピーな孤独死とは――121
自宅での看取りとお葬式――125

やすらかに生き　やすらかに死ぬ――132
西山　厚さん【帝塚山大学文学部教授・前奈良国立博物館学芸部長】
大好きな人にまた会える――133
お浄土には行きたくない？――139
仏教は悲しみとともにある――145

何があっても無条件の救い――152
駒澤　勝さん【小児科医】
本当の優しさとは――153
いのちはすり替えられない――159
阿弥陀さまの懐の中――164

第四章　物語をつなごう

信じる心を態度で示す　伝えたい住まいと食――174
杉本節子さん【料理研究家】
お仏間は心のよりどころ――175
態度で示すお念仏の暮らし――181

語りを響かせる　本堂の建築と文化――188
伊東　乾さん【作曲家・東京大学大学院准教授】
一緒に笑う親鸞さま――189
真宗寺院の構造と声の響き――193

受け取った物語を思い出してなぞりたい——202
篠原ともえさん【タレント】
自然に手を合わせたくなる空間——203
受け継いでいく習わし——208

第五章 出会いに育てられて

ありがとう おかげさま 丁寧にパスを渡す——218
二木てるみさん【声優・俳優】
人との出会いなくして私はいない——219
中身を丁寧に手渡していく——225

ひっくり返す力 揺さぶる言葉——232
天岸淨圓さん【僧侶・布教使】
仏教入門の最初の一歩——233
人間の評価だけではない——236
言葉がさらーっと解きほぐしていく——241
うまいことひっくり返された——245

第一章

どうにも収まらない

池上 彰さん
【ジャーナリスト】

大村英昭さん
【大阪大学名誉教授・圓龍寺前住職／故人】

宗教はどれも尊い世界から仏教を見る

Akira Ikegami

池上 彰さん
【ジャーナリスト】

生きている、生かされている

釈　池上さんのご著書『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』（文藝春秋）には、仏教のほか、キリスト教やイスラム教についても書かれていますね。世界を見るとき、宗教を通して見ると、そこに民族性や文化性が現れてきて、視点もまた違ってくるものでしょうか？

池上　そうですね。数日前にイラクから帰ってきたばかりですが、中東に行って日本に帰ってくるたび、私は和辻哲郎が著（あらわ）した『風土』（岩波書店）を思うんですよ。人間の在り方と風土性について、本当によくわかる気がするんです。今回、イラク南部のペルシャ湾に面したバスラという港に立ち寄ったときに、寒暖計を持って行ったんですが、日なたに出すと、あっという間に54℃を示しました。目盛の上限がそこまでだったので、ひょっとするとそれ以上かもしれないですが、ともかく54℃の気温を実感することができました。一方、湿度は15％くらいですから、熱風が肌に当たって、痛いんです。その代わり、日陰は過ごしやすいですよ。

釈　ああ、だから、アラブの人はゆったりした服を着ているのですね。

池上　そうなんです。日よけになって風を通すからなんですね。そして、そんな過酷な自然の中で生きているからこそ、神さまと一対一で相対することになるのだろうなと思うわけです。厳しい環境の下では、ふとしたことで人は死んでしまいます。そんなとき人は、人間ってちっぽけな存在だと思う。そして神さまの怒りに触れてしまったと思う。そんな気持ちがわかるような気がするんです。

釈　近年は、日本の夏も連日30℃を超えるので、けっこう大変ですけれども。

池上　でも、日本の大気は肌にやさしいでしょう。飛行機で成田空港に近づいてくると、緑が見えてきますね。すると「わあ、緑がいっぱいだ」と思う。そしてドアが開いた途端、湿気が一気に入ってきて、「湿気の国に帰ってきた」と思うんです。そうすると、日本人のウエットな感情は、この湿気からきているのかなと思ったり、たくさんの緑を目にすると、いろんな所にさまざまな働きが宿っていると感じたりするんですよね。

釈　自然が人間と敵対するような環境では、立ち向かっていくことや、コントロールする技術を身につけなければ生きていけない状況があるんでしょうね。日本のような豊かな自然の中では、人間も自然の一部というような感情が生まれてきます。宗教観や死生観、人間観、世界観なども、気候や風土の影響が少なくありません。

池上　地域によって、その自然によって、それぞれの自然観や世界観が違うということを客観的に見ると、自分をとりまく自然や環境によって私たちは生かされているんじゃないかなというふうに思いますね。

釈　「生きている」から「生かされている」への転換は、仏教で言えば「縁起」の教えです。縁起とは、すべては関係性の中で生起・消滅するという立場です。その立場に立つことで、我々はさまざまなこだわりや、はからいを捨てる方向へと向かうことができると説きます。仏教は、壮大な人類の知恵といった面がありますね。

池上　子どもの頃から法事などで、お坊さんがお経をあげるのを聞いてきましたが、実はそれがなかなか素晴らしいものだと私が自覚できたのは、ほかのいろいろな宗教を知った結果です。ほかの宗教が間違いだとか、劣っているとかとは決して思いません。キリスト教にしてもイスラム教にしてもヒンズー教にしても、人智の及ばない超自然的な何かによって私たちが生かされているという思いは、いずれも共通していると思うし、どれも尊いものだと思います。その上であらためて仏教を見ると、なかなかよいものだなあと思うようになったのです。

釈　国際情勢についても、宗教を通して見ると、違った見え方がしてくるものなのでしょうか？

池上　ええ、多面的というか、重層的に見ることができると思いますね。例えば、アメリカでは民主党と共和党の二大政党が競い合っていますが、キリスト教の原理主義的な考えを持つ福音派と呼ばれる人たちのほとんどが、共和党の支持者です。ですから、共和党の大統領候補になるには、福音派の支持を得ることが必要になります。

釈　アメリカ国内の宗教事情がわかっていないと、政治の先行きも読みにくいというわけですね。

池上　また、ヨーロッパでEUがなぜまとまったかというと、背景に同じキリスト教徒であるという親和性があったからです。ですからトルコが加盟したいと言っても、本音の部分では、キリスト教徒以外の国だから一緒になれないということがあるのです。逆に東ヨーロッパの国々とは、経済的にはずいぶん違うけれども、ロシア正教会系で同じキリスト教だということで一緒になれるのです。

釈　私は以前、パレスチナの難民キャンプを訪れたことがあるのですが、聖書の物語が支える強さというものを感じました。ちょっと郊外へ出ると、荒野になっているんですが、

本当に不便な土地にユダヤ教の人たちが二、三軒集まって暮らしている。なぜ、あんな所に住んでいるのですかと聞くと、そこは聖書に出てくる地名の場所だから、ということでした。

池上　聖地ですよね。ヨルダンには、モーセ終焉の地と呼ばれる、ゆるやかな丘があります。旧約聖書では、モーセは大勢の人を引き連れて約束の地にたどり着く直前で亡くなるわけですが、その場所は、約束の地が見えているのに、たどり着けずに亡くなった場所なんです。その丘に立って約束の地、つまりイスラエルの方を眺めると、荒涼とした風景の中にそこにだけ緑が見えます。「蜜と乳の流れる地」と言いますが、つまり緑への願望